

!!! 今月の SpotLIGHT

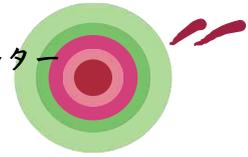


嘉手納基地で働く様々な職種の日本人従業員にスポットをあてて毎月紹介して行くコーナーです。今月はこの方です。



在日米国防省沖縄地区教育局、文化交流コーディネーター

まさしろ ひろゆき
正代 博之さん



Q1. あなたの職種と仕事の内容を教えてください。

私の職種は、在日米国防省沖縄地区教育局の文化交流コーディネーターです。日本の公立の学校とDODDS（国防省管轄の教育機関）の架け橋ともいえる仕事で、主に、沖縄にある全てのDODDSの学校と地元の学校との交流を、先方の担当の方と連絡をとりあいながら調整します。北はベクトル小学校から、南はキンザーまで、DODDSの小中高全部です。小学校が、中学校に比べると校数も多いため、比較的交流が盛んです。地元沖縄の生徒が、基地内学校に来ることもありますし、逆にこちらから日本の学校を訪問することもあります。また、高校レベルでは、部活の練習試合といった交流もあります。私は、主に調整までを担当し、実際の交流には各学校に担当の先生が付き添います。

SpotLIGHT SpotLIGHT!

Q2. 職場のスタッフ構成は？

私のポジションでは担当は1人です。渉外担当など他にもいますが、学校担当は私だけです。日本人スタッフは私を含めて7人、予算、事務業務を担当する課にいます。その他にもアメリカ人のスタッフもいます。

Q3. この職場に勤めてどのくらいですか？

SpotLIGHT!

約3年になります。以前は、まったく違うIT関係に、10数年勤めていました。今の職種に応募したのは、内容的に面白いかなと思ったのもありますし、もちろんDODDSの子供たちと日本人の子供たちの交流を通じての架け橋になればといった思いもありました。

SpotLIGHT!

Q4. この仕事のどのようなところにやりがいを感じますか？

子供たちに関われるというところに、楽しみを感じています。個人的に、自分の子供の部活とかを面倒見ていまして、日頃から子供たちと関わっててます。その際感じるのが、やはり子供たちに、アメリカの文化、つまり自分たちとは違う文化を知ってほしいな、というのがあります。特に沖縄の場合、米軍基地もありますので、子供たちに違う文化に触れてもらって、できれば国際的になってほしいと思っています。自分ひとりでは、無理だとは思いますが、少しでも貢献できればと思っています。実際に、DODDS側の先生方から、日本の給食などを体験するなど、交流を通じて文化的な違いを学ぶことだできて大変良かった、といった声を聞くこともあります。もちろん、たまに「これが違う、あれが違う」といったマイナス面もあります。ですが、逆に違った経験ができた、ということで喜んでもらっています。地元の学校からもそういった声を聞きます。アメリカ・エアハート小学校と越來小学校のように姉妹校になっている学校もあります。特に仲が良いのは、DODDSのカテナ・ミドル・スクールと山内中学校です。日本側の学校が春休みの時には、約30人の子供たちがこちらの学校に来て授業に参加し、夏休みには逆に、こちらの子供たち約30名が向こうの授業に参加する、といったこともやっています。子供たちにとっ



は、言語の壁はあまり関係ないようです。初めは恥ずかしがっている子もいるのですが、最後には肩をくみあっていますよ。このような光景をみれるが大変楽しみです。

(次ページへ続く)

SpotLIGHT! SpotLight

Q5. この仕事に一番の課題は何ですか？

あまり課題というのはいないんですが、基地内への入域手続きが厳しくなった際に、お断りしないといけないときは残念に思います。先方に説明するときも、基地内の事情をお話するのが難しいときもありますし。その他にも、10月から年頭にかけて交流が盛んな時期や、スポーツシーズンなど依頼の多い時期もあり、調整する件数が増えるときは少々大変ですが、そういう時は学校のコーチも手伝ってくれたりします。



Q6. アメリカ人と働く環境での一番の課題は何ですか？

実際自分は、アメリカにも住んでいて、向こうでも働いていたので、逆に日本の民間での経験のほうが短いです。そのため、アメリカ人と働くうえで、特に文化的な壁、というかカルチャーショックは特にありません。



Q7. 軍の仕事で一番驚いたことは？

軍での仕事を始めて特に驚いたことはありませんが、1つ挙げるとすれば、自分の直接的な体験ではなんですけれども、「昨日の部下が、明日の上司に」といったケースがあることです。日本では年功序列といいますか、階段式にポジションも上がっていく、というのが一般的です。アメリカでは、ポジションに対して、応募して採用されていきますので、採用さえされれば、間を飛び越して、先ほどのようなことも起こりうるということです。これは自分の知り合いの職場であったケースで、大変まれなことだとは思いますが。



Q8. 同じような職種に就こうと考えている方へのアドバイスは？

やはり橋渡しとしての役割が大きいので、双方の文化への理解を深めてほしいと思います。どちらも好きになること、そして偏らず両方の良い面を理解し、交流の際にできるだけ相手への誤解が少なくなるように、双方の良い面を引き出せるようにすることが大事だと思います。また、自分たちの同僚や上司とのやりとりもあるので英語の能力も必要ですが、日本の学校の先生たちとの調整も多いので、日本語の能力も大事だと思います。

(写真全て、嘉手納基地広報局：川武 沙弥香 撮影)

DODDS-Okinawa

SpotLIGHT! SpotLIGHT!
SpotLIGHT! SpotLIGHT!
SpotLIGHT! SpotLIGHT!

HIROYUKI MASASHIRO!

F-22ラプター戦闘機、嘉手納基地に一時配備

第18航空団広報局

バージニア州ラングレー空軍基地の第1戦闘航空団に所属しているF-22戦闘機12機が、7月28日から7月31日にかけて、嘉手納基地に到着しました。およそ4ヶ月間、嘉手納基地に一時的に配備される予定です。天候、空中給油機的能力、整備上の事情、安全への配慮等、様々な要因が、飛行運用に影響を及ぼしますが、米国空軍は日米政府間の騒音軽減に関する合意を尊重および順守し、航空機の離陸時間を計画する際には合意に沿った手続きを踏みます。F-22戦闘機の嘉手納基地への展開は、米国太平洋軍の西太平洋地域における安全保障上の責務を支援するもので、展開する部隊は、嘉手納基地第18航空団の指揮下で訓練を行います。今回で6回目の嘉手納基地への一時配備となりました。



(米空軍：ダネル・ケネディ二等軍曹撮影)



(写真2点、米空軍：マリア・シモンズ上等兵撮影)

18th Wing Commander Showcases Mission to Diet Members

自民党青年部議員、嘉手納基地を視察

第18航空団広報局

2012年7月25日、第18航空団司令官マット・モロイ准将は、衆議院議員で自由民主党青年局長の小泉進次郎議員および全国から参加した自民党青年部の約60名を歓迎し、嘉手納基地の概況説明を行い、また飛行場へと案内しました。概況説明では、第18航空団の任務は卓越した戦闘航空力と展開戦力基盤、及び日本国の防衛を提供することと紹介し、また嘉手納基地の戦略的重要性を説明しました。概況説明が行われた会場はPMEセンターと呼ばれ、空軍下士官の研修施設であり、日本政府予算で建設されたこと、また航空自衛隊の隊員も同施設で研修する機会があることなど説明しました。飛行場内では滑走路近くで、航空団所属のF-15戦闘機などを紹介し飛行運用の説明などを行いました。

在日米軍司令官交代式

第18航空団広報局

2012年7月20日、横田基地にて在日米軍司令官交代式が挙行されました。バートン M フィールド中将に代わり、サルバトーレ A. サムアンジェラ中将が新司令官に就任しました。アンジェラ中将は、ワシントンDC国防総省の統合参謀本部戦略計画政策部次長からの転出です。バートン中将は、国防総省米国空軍本部の戦略・計画・要件の副参謀長に転入しました。在日米軍司令官のポジションは、日本に駐留する米軍（海兵隊、空軍、海軍、陸軍を含む）と日本に駐留する空軍を統括する最高司令官として、二つの職務を兼任しています。

CHANGE OF COMMAND



(U.S. Air Force Photo)

琉球大学学生、嘉手納基地を視察

第18航空団広報局



2012年7月26日（木）、国際政治や安全保障を学んでいる琉球大学の政治学専攻の3、4年生の学生が嘉手納基地を訪問しました。冒頭、第18航空団広報局長のアンダーソン少佐が挨拶し、一行を歓迎しました。その後、嘉手納基地の任務についての概況説明が行われました。その間、熱心にメモを取る学生の姿も多く見られ、関心の高さを示していました。質疑応答では、米空軍と自衛隊とのパートナーシップや騒音軽減、東日本大震災後のトモダチ作戦への嘉手納基地の部隊の関与についての質問があり、広報局長のアンダーソン少佐が、日本国の共同防衛やアジア太平洋地域の安定のために米空軍が沖縄に駐留していることや、震災直後の嘉手納基地部隊の動きを説明、日本のパートナーとして災害時に支援するのも大切な努めであったと述べました。そして、「沖縄の将来を担う皆さんとこのような対話の機会を持てたのは幸いです。今後も、地域のリーダーになっていく若い人々に私たちの任務について学ぶ機会を提供していきたい」と語りました。概況説明の後は、同広報局広報官の

ホープ・クローニン中尉が基地内を案内しました。地元の住宅地域への騒音の影響を考慮した特別な離着陸方法や、騒音軽減を図る防音壁など嘉手納基地の騒音軽減への真剣な取り組みを紹介しました。

沖縄市議会議員、嘉手納基地を視察

第18航空団広報局

8月14日（火）、沖縄市議会基地に関する特別調査委員会の議員と沖縄市役所基地政策課の職員の方々が嘉手納基地を訪問しました。これは、第18航空団広報局が地域住民の方々に嘉手納基地の任務についての理解を深めていただき、対話の機会を得るという趣旨で実施している基地内視察プログラムの一環です。同広報局にて広報局長のアンダーソン少佐が歓迎の挨拶を述べ、参加者は嘉手納基地の任務や機能について概況説明を受けました。その後、アンダーソン少佐は、嘉手納基地が有事の際に、応援部隊を受け入れることができる前方展開戦力基盤として戦略的に有用であること、防衛任務における自衛隊との協力関係や共同訓練の重要性について語りました。また、そのような任務を沖縄で遂行するにあたり、地元との友好的な関係を築くことは非常に重要であると述べ、航空団として事件事故防止のために空軍兵や軍属、その家族の指導や教育に真剣に取り組んでいる旨を紹介しました。また、参加者からは嘉手納基地に隣接するという立地を活かした教育 交流プログラムについて熱心に質問する様子もみられました。

基地内ツアーでは、ハブ・ヒルと呼ばれる滑走路が一望できる場所に立ち寄り、実際の航空機運用の様子を見学しました。その後、「平和の園」へ移動。ここは、1945年9月2日横須賀で行われた日本国の降伏文書調印に関連して、同月7日に沖縄における日米両軍の司令官によって正式に沖縄戦終結に関する文書が調印された場所です。

歴史的な場所を熱心にカメラに収める姿がありました。最後に、将校クラブで昼食をとりながら、議員らから沖縄市が取り組む国際的な祭りなどについて説明もあり、広報局長も対話の大切さを実感したと感想を述べていました。





(写真全て、米空軍・ジャスティン・レイ上等兵撮影)

「第19回沖縄市の戦跡めぐり」 第18航空団広報局

沖縄市役所主催による「2012沖縄市戦跡めぐり」が、7月31日に実施されました。沖縄市民、沖縄市内在職者、沖縄市役所職員、沖縄市の姉妹都市である山形県米沢市民を含む約100名の地域住民が参加し、日頃見学する機会の少ない基地内の沖縄戦関連の戦跡 史跡を見学しました。「降伏調印式の碑（別名 ピースガーデン）」、「旧日本軍中飛行場格納庫跡」、「旧日本軍野

戦病院跡（方言名 ウカマジー）」を訪れ、第18航空団広報担当の説明を通じて、それぞれの場所で歴史的な意義の説明を受けました。嘉手納基地は第1回目の戦跡めぐりから毎年視察を受けられ、本年度19回目を数えました。

嘉手納基地、スペシャルオリンピックス活動を支援

第18航空団広報局

知的障害者のスポーツ活動を支援するスペシャルオリンピックス（SO）は1960年代に米国で始まった活動で、そのため沖縄に駐留している米軍人、軍属、家族はSO活動を知っている人も多く、関心も高い。毎年11月には、在沖縄米軍が一体となって「嘉手納スペシャルオリンピックス」を主催し、地元沖縄から毎年およそ900人ほどの障がいのある人々が参加して、ボランティアとともにスポーツに汗を流している。一方、日本にはSO日本を中心に全国に地区組織（設立準備委員会含む）があり、SO日本 沖縄もその一つである。8月11日（土曜日）、嘉手納基地の北側にある知花ゴルフコースで、SO日本 沖縄に所属するアスリート（知的障害のある人でSOのスポーツ練習に参加している人）とボランティアのおよそ20名が、ゴルフの試合を行った。米人ボランティアも「キャディ」役を買って出て、アスリートらと一緒にコースを回った。ボランティアとアスリートが交互にプレーするオルタネート方式である。SO活動



(写真提供：小山幹太氏)



を支援する知花ゴルフコースのスタッフ一同は、当日の時間調整や一般のゴルファーに趣旨を説明し理解を求めると、およそ4時間アスリートらがのびのびとプレーできる機会を提供した。

「旧盆の日」における飛行制限措置

第18航空団広報局

嘉手納基地では地元の文化的行事を尊重して、特別な意義のある日には、日米航空機騒音規制協定に則り航空機の飛行活動を制限しています。例えば、今年の旧盆は、8月30日、8月31日、9月1日に当たりますが、同3日間は「NO FLY DAY」として、特に戦闘機を中心とする航空機の飛行運用を自粛しています。また第18航空団独自のイニシアチブとして、旧盆が終わった翌日の午前中まで、騒音の影響を最小限にするよう務めています。「NO FLY DAY」は、3月の県立高校入試日と6月23日の「慰霊の日」にも、実施されています。

Skoshi Kadena, published by 18th Wing Public Affairs, Kadena Air Base Kadena Web Site: <http://www.kadena.af.mil> E-mail: 18wg.pa@kadena.af.mil



Chief, 18th Wing Public Affairs Office: Major Christopher Anderson

Editors: Ms. Takako Fukuhara, Mr. Hideaki Sakihama, Ms. Keiko Toma, Ms. Sayaka Kawatake, Ms. Makiko Miyara and Ms. Derrice Daniels

Graphic Designer: Ms. Naoko Shimoji

The Skoshi Kadena is published monthly and is an authorized publication by 18th Wing Public Affairs in Kadena Air Base. Contents of the Skoshi Kadena are not necessarily the official views of or endorsed by the U.S. Government, the Department of Defense, or the Department of the Air Force. The editorial content is edited, prepared, and provided by the 18th Wing Public Affairs Office. All photographs are Air Force photographs unless otherwise indicated. Contents may not be reproduced, distributed, or translated without the prior written permission from the 18th Wing Public Affairs Office.

『スコシカデナ』は、嘉手納基地第18航空団広報局より毎月発行されている出版物です。編集内容は、第18航空団広報局により編集、準備、提供されています。掲載される内容は、米国政府、米国国防省または米空軍の見解・承認を必ずしも反映するものではありません。第18航空団広報局の書面による事前許可なしに、掲載写真や記事の無断転載を禁止します。